

『醜いアヒルの娘』

END F 用続編

白い子供たちの中に一羽、醜い姿の子供がいました
あれは誰？ あれは誰の子？
あの子は “ ” の子

01. はじめに

このシナリオはクトゥルフ神話 TRPG 基本ルールブックに対応したシナリオである。

マレウス・モンストロルムのクリーチャーを使用している。

舞台	現代ドイツ
プレイ時間予想	4 時間程度 (ボイスセッション)
推奨人数	1～3 人程度
推奨技能	<目星> <聞き耳> <ドイツ語>
準推奨	<医学> <回避> 戦闘技能
難易度	中
ロストの可能性	中
発狂の可能性	高

エンド F 用の続編。いつ怪物になるかも分からない少女、エリーと探索者の別れを描く後味の悪いシナリオです。

02. 事件の真相

エリーが空中ブランコ乗りを辞めてから約 1 年。エリーは、ニョグタの夢を送られ精神を日に日に病んでいき、ニョグタの意思に屈しかけていた。怪物化を食い止める方法を探るため、エリーは探索者と共に彼女の生まれ故郷と思われるドイツへ飛ぶ。

しかし、そこで待ち受けていたのは彼女の変化を止めることはできないという事実、そして定められた悲しい別れだった。

エリーの出生の秘密と、落とし子の悲惨な運命を辿る旅へ、探索者を誘おう。

03. 登場するクリーチャー・NPC

■エリー

醜い怪物の娘

STR 18

CON 14

SIZ 15

INT 15

APP 17

POW 18

DEX 14

db+1D6

[技能]

<空中ブランコ（三回宙返り）>

80%

<ドイツ語>

70%

<日本語>

50%

<スペイン語>

40%

<英語>

50%

その他、KP の望む技能

[呪文]

<神格との接触/ニョグタ>

これは無意識にニョグタの夢から教わった呪文であり、彼女が接触を望めばニョグタは彼女を自分のいる場所へ招き入れる。

空中ブランコ乗りだった少女。19 歳。金色の髪、青い瞳、色白の西洋人っぽい顔立ちをしている。<人類学>に成功すれば、彼女がゲルマン人の特徴を持っていることが分かるかもしれない。確かに、彼女はドイツで拾われた子供で

ある。

彼女は<回避> や <跳躍> などの技能を持っているだろう。探索者に危険が及んだ場合、探索者を庇う。

探索者と過ごした1年間はとても充実していたと思っており、空中ブランコ以外のことにも興味を持って様々なことができるようになった。サーカスを辞めても、エリーは人々を魅了してやまない。彼女の意思とは関係なしに、彼女は人を惹きつける。それは、人ならざる存在であるからなのだろうか。

最近、悪夢に魘され飛び起きることがよくあり、怪物化が進もうとしているのではないかと怯えている。

「みんなの得意なことは上手くできないけど、私にしかできないこともあるって分かってるから、平気なの」

「ねえ、私、嫌よ。私は私よね？ 私は、エリー。ねえ、そうでしょう……？」

■グレートヒェン・マーギアー

真実を知る女医

STR 12 CON 9 POW 13 DEX 14 APP 12
SIZ 17 INT 16 db +1D4

[技能]

<医学> 80% <薬学> 70% <精神分析> 80%
<生物学> 70% <クトゥルフ神話技能> 45%

その他、KPの望む技能

[呪文]

治癒 (ルールブック p.272)

ドイツの田舎、森の中でひっそりと診療所を開いている女医。神話的事象に何度も巻き込まれており、そういった事件の後遺症を持つ患者や、他では診てもらえない元「ヒト」である

人々を診察している。エリーの所属していた白鳥サーカス団も、ドイツに立ち寄るたびに彼女の診療所を訪れていた。

彼女はエリーを救う手立てをずっと探していたが、結局見つからなかった。これ以上手立てはないと彼女は分かってしまったのだ。諦めたのではなく、そう結論付いたのだ。

彼女は諦めきれない探索者の鼻先に現実を突き詰めようとはしないだろうが、諦めるしかないのだと諭すだろう。

■ハンス・エンデ

ニョグタの落とし子に焦がれる男

STR 16 CON 13 SIZ 12 INT 14 POW 10
DEX 18 db 0

[技能]

<かぎ爪> 30% 1D6+db

<噛みつき> 30% 1D6+牙でいたぶる (1D4)

<日本語> 30%

ニョグタの落とし子であるヨシュカ・ネルソンに執着する男。その正体は、ニョグタを信奉するグールである。エリーが怪物化すれば、親の元に帰るという性質を知った彼は、エリーが怪物化する際にヨシュカと出会えるのではないかと気づいてしまう。

深く帽子を被り、マスクをしたコートの老人。

■リュメル・ヒル

足を失った冒険家

STR 9 CON 14 POW 15 DEX 4 APP 14
SIZ 13 INT 16

[技能]

<日本語> 50% その他 KPの望む技能

元冒険家の男性。アフリカで赤い回転流に遭

遇したことで、回転流の従者にやられ、足が木になっている。故に、車椅子で移動している。彼もまた、神話的事象に幾度か巻き込まれている。探索者によき助言をくれるかもしれない。

■ウルリーケ・ミッチェル オオカミ女

STR 18 CON 15 POW 12 DEX 13 APP 9

SIZ 11 INT 8 db +1D4

[技能]

<噛みつき> 30% 1D8+db

<キック> 65% 1D6+db

元人間の狼女。かつて狼人間に噛まれたことにより、狼人間になってしまった。ドイツ語しか分からないが、ドイツ語で協力を求めれば彼女は協力してくれる。※噛みつきによる狼男の感染（ルールブック p.230）はニョグタの落とし子にも起こる。ただし、ニョグタの落とし子であることは変わらないし、人間になるわけでもない。むしろ最悪なクリーチャーが生まれるかもしれない。

エリーをタイマンシナリオの KPC として他のシナリオで PC と遊ばせておく
とこのシナリオの重みが変わると思うのでおすすめします。地獄か。

04. プロローグ

豹のように飛び出し、鮎のように跳ね、鳥のように宙を舞った「空中ブランコ乗りのエリー」は、喝采に追い立てられるように、照明から逃げ出し、舞台を抜け出し、探索者の近くで日常という名の戯曲を台本通りに演じていた。彼女の役柄は、何だろう。恋するただの少女か、あるいは探索者の助手か、はたまた探索者の血の繋がらない家族か――。

あの日魔法は解けて、彼女はエリーとなった。探索者の願いが、彼女を今のように変えた。幸せな一年を過ごしたことだろう。春には桜を見て微笑みながら切なさを感じ、夏には蟬時雨を

聞き音の正体を探しに照り付ける太陽の下を駆け回り、秋の散りゆく紅葉の中を歩き、冬は冷たい雪の朝を迎え隣のぬくもりにホッとしたりして、微睡んで、このまま変わらぬ日常が続いていけばいいのにと願っただろう。それがどれだけ贅沢なことなのか、探索者は知ることになる。

運命の、不幸を知らせる扉を叩く音は、いつも唐突なのである。

05. 導入

エリーのもとにグレートヒェンから手紙が届く。ドイツ語で書かれた内容は、サーカスから脱退してしまった彼女に健康診断をすすめるものだった。彼女は探索者に、グレートヒェンの所へ同行してくれないかと頼む。

近頃、エリーは寝不足のようだ。彼女は悪夢に魘され、よく眠れないのだという。探索者が同行すると言えば、彼女は急いで旅支度を始める。

また、探索者はエリーの体に一か月前ほどから黒い斑点が出ていることに気づいている。エリーが教えてくれたのかもしれない。あの時、1年前と同じ状況だ。しかしあの時ほど斑点が広がる速度は遅く、日に日に足先から上へと斑点が浸食していった。痛くも痒くもないらしい。既に、体の半分ほどまできている。

■エリーの部屋

エリーのベッドには、日記が開かれて置いている。拙い日本語で書かれたそれを読むことは容易いだろう。

[エリーの日記]

○月×日

暗い洞窟にいる夢を見た。1年前に見た白昼夢

と同じようだった。

黒い闇のようなものが、私に語りかける。

エリー、エリー、こちらへおいで、と。

嫌だ、怖い。 そう思って逃げても、出口なんてなくて。

どれだけ豹のように走っても、鳥のように飛んで鮎のように跳ねても、逃げられない。

○月×日

あれは何？ 虫の、大群？

気持ち悪い！ 私の体を這いまわらないで！

消えて！ 消えてよ！

○月×日

青い石が落ちている。 久しぶりにきれいな夢を見たと思ったのに。

ヘンゼルとグレーテルのように石を辿っていくと、そこには黒い毛布のような、洋梨みたいな姿の生き物がいたわ。

私はなぜかそれをネズミだと思った。 不気味で、恐ろしい。

なんでこんな夢ばかり。

○月×日

見世物小屋のような場所で、男の人がいた。

ゴムのようにお腹を伸ばしたり、関節なんてないみたいに腕を曲げてみせたり。

知らない人だけど、すごく懐かしく感じたわ。

けれど、その人は人じゃなくなってしまった。

そして私に言うの。

「おかえり」と。

あれは、誰？ ネルソン……？

おかえりって、何？

エリーの悪夢 で見た夢が追記されていく。

06. ドイツへ

空港から電車で3時間揺られ、丘を越え、川を越え、バスで2時間かけて山を越え、広大な森の前の停留所で降りる。 舗装されていない獣道 ドイツの田舎、人里離れた森の奥に、グレートヒェン・マーギアーの診療所はある。 手紙の住所と地図と、エリーの昔の記憶を頼りに、探索者とエリーの旅が始まる。

鬱蒼と茂るダークグリーンの木々以外には、驚くほど何もない場所だ。 獣道と言っても差支えのない頼りない道が森の奥へと続いている。 勿論、降りたのは探索者とエリーだけだ。 コンパスと地図と睨めっこしながら、森の小道へ足を踏み入れていく。

ドイツの森は、昼間だということにとても不気味だ。 太陽を目指して上へと伸び、他の木々に負けじと光を浴びようと広がる広葉樹の群れは、探索者に光を分けてはくれない。 その木は、かつてのエリーのような。 光を浴び、宙を舞う。 暗い森は、彼女の心の中を反映しているかのようである。

暫く進むと、小川のせせらぎが聞こえる。 音を頼りに進めば、小川に沿うようにひっそりと、木造の二階建ての建物が見えてくる。

扉をノックして、エリーは中に入っていく。 中には何人か人がいるようだった。

診療所の待合室には、深く帽子を被りマスクをしたコートの老人や、長い髪で顔を隠す女、車椅子に座った男が、それぞれ離れた席で本を読んだり、窓から外の景色を眺めたり、ただぼんやりと室内にある時計を見ている。 彼らは探索者たちを一瞥すると、すぐに興味なさそうに視線を逸らす。 しかし、<アイデア>に成功すれば、その視線がエリーに向いていることが分か

エリーはこの夢日記もドイツへ持っていく。 ここで探索者が見つけなかった場合、適宜情報を出している。 また、この日記はイベント ■

る。

受付らしき場所には呼び鈴があり、エリーは「いつもはサーカスの皆と一緒に貸し切りで診察してもらっていたから、他のお客さんがいるのは初めてで緊張しちゃう」と探索者に耳打ちしてから呼び鈴を鳴らす。

茶髪に少し白髪混じった初老の女性が、奥から現れる。彼女が、グレートヒェン・マーギアである。彼女は探索者を見て少し複雑そうな顔をするが、「よく来たわね、エリー。辞めたとは聞いていたけど、元気そうでよかったわ」と言い、探索者に自己紹介をする。

「初めまして。私はグレートヒェン・マーギア。医者をしているわ。あなたも一緒に診察室へどうぞ」

07. グレートヒェンの問診

グレートヒェンはエリーから悪夢の話聞き、そして探索者にエリーがいずれ怪物になってしまうことを知っているかと尋ねる。暫く考えた後、彼女は探索者とエリーにはっきりと宣告する。

「もしかしたら、エリーがエリーでなくなるのは、もうすぐかもしれない」

そのタイムリミットははっきりとは分からないという。エリーが親である怪物からこの世界の恐ろしい神々の知識を夢で送られているのが、怪物からの影響を受けている証拠であるという。また、その怪物の名はニョグタ、粘性のあるゼラチン状の塊であるとグレートヒェンは教えてくれる。

彼女はニョグタについて得た情報を、探索者とエリーに聞きたいかと尋ねる。エリーは聞きたいと答える。自分が怪物にならない為に、怪物のことを少しでも知りたいと考えているからだ。探索者も知りたいというのなら、地下の研

究室に案内される。

■研究室

ひんやりとした石造りの階段を下りると、木製の扉が立ち塞がる。グレートヒェンは扉にかかった鍵を開け、部屋の電気を点ける。そこは、医療関係の資料が山積みになされた机や本棚、薬品類の入った瓶が並ぶ棚で埋め尽くされた部屋だ。

<ドイツ語>で書かれたニョグタについての研究レポートだ。グレートヒェンによって書かれた。ドイツ語が読めなければ、グレートヒェンが説明してくれる。

[ありえべからざるものの研究レポート]

悪臭を漂わせる液体とも個体とも言えぬゼラチン状の怪物は、黒き闇を思わせ死が纏わりつく。地球の地下に潜むその塊は、黒ではあるがよく見ると玉虫色をしている。それは信じられないことに、生きた塊なのだ。このありえべからざるもの、ニョグタは驚くほどに巨大で、人間を捕食する。かつてドイツの魔女たちは生贄を捧げる代わりに、魔術の知識を得ていたという。ニョグタに陶酔していたという魔女は、ニョグタから生み出される落とし子を用いニョグタに接触していたと証言している。ニョグタの落とし子は思春期から親によってこの世の知られざる冒瀆的な事象や知識を植えつけられる。そうして人間らしい思考を奪われ、親の意思を悟った時完全にその精神は親に屈する。

ニョグタの落とし子として確認されているのが、1920年代に見世物小屋で活躍していたヨシュカ・ネルソン。ネルソンのケースは親であるニョグタの液体を何らかの理由で摂取したことによって、怪物化が速まったものだと考えられる。当時の見世物小屋には、彼の他に人間と異なる生物も

混じっていたと報告がある。(信憑性は薄い)

ネルソンは見世物小屋において大変人気のある人物だったことが伺える。彼は人を魅了する能力があったのだろうか。黒い血を持つ落とし子は大変美しい顔立ちと、恐るべき柔軟性、身体能力の高さを持つという特徴が見受けられる。また、怪物化したネルソンは火による攻撃に全く憶することがなかったという。怪物は鋭い牙で噛みつき、巻きひげのようなものを伸ばし人を捉えると窒息死させた。また、人を捉えてかぎ爪で引き裂くこともしたという。

エリーはサーカステントの前でパートランドに発見された。黒い液体に塗れた赤子の姿だったという。エリーの報告を受けるうちに、ネルソンとの類似点が多いことが判明した。彼女も人を魅了する容姿を持ち、高い身体能力と柔軟性を持つ。彼女の怪物になる時期がいつなのかは不明だが、悪夢を見始めたらいつ怪物になってもおかしくないだろう。怪物化を止める方法は、今のところ見つかっていない。夢を送られることがなければ怪物化は阻止できるかもしれないが、ニョグタの落とし子は睡眠を必要とする生物だ。

エリーの血液で試した結果、火・酸・電気による影響は受けなかった。もしかすると、放射線も効かないかもしれない。

この恐るべき事実を知った探索者とエリーは、SANC(1/1D3+1) また、クトゥルフ神話技能に+1%

グレートヒェンは二人に「まだ解決策は見つからないの。けれど、こうして来てもらったのには訳がある。私は諦めたくないの。エリーとあなた(探索者)の写真を、エリーが送ってくれた時、エリーが幸せそうだったから。私は正直言うと、諦めていたの。ごめんなさい、

エリー。けれど、あなた達の決断と勇気に、心を動かされた。エリー、あなたはまだ人間の女の子よ。人間としての幸せを得る権利は必ずあるはずだわ。一緒に頑張りましょう。あなた(探索者)も、エリーの為に協力してちょうだい」と探索者に告げる。

その後診察室に移動しグレートヒェンはエリーから採血し、診察を試みようとする。探索者には診察室から出ていくように言う。診察が終わったら再び呼ぶので、待合室で待っていてほしいという。出ていこうとしないと「今からエリーに裸になってもらわないとだから……」とグレートヒェンが言い、エリーは顔を真っ赤にして「お願い、出てって!」と恥ずかしそうに言う。ニョグタ以外の悍ましい生物たちの資料があるので研究室には入らない方がいいと言うが、強く止めはしない。

08.イベント

■エリーの見る悪夢

エリーは毎晩、ニョグタやその他のグレートオールドワンに関する夢を見ている。エリーは以下のような夢を見ていたことになる。(SANCはしなくてよい)

- ・ニョグタの夢。 SANC(1D6/1D20)
- ・虫の夢は、虫の大群として現れる女王ズスティルゼムグニ。 SANC(1D6/1D20)
- ・青い石と謎の生き物の夢は、暗い場所を好む別次元からやってきたヴィブール。

SANC(1/1D6)

- ・ネルソンの夢は、ニョグタの落とし子の血を目撃した時の SANC と同値。 SANC (0/1D3)

以上の夢を見て、エリーの SAN は減少してい

る。更に、探索開始後に以下の夢を見る。

・探索1日目の夢

サーカスのテントの中、客が押し寄せている。エリーを出せ、と団員達に物を投げており、団員達はエリーに助けを求めている。エリーは慌ててステージに飛び出すが、客はみな、粘着性の黒い液体に覆われたゾンビ達だった。エリーは空中ブランコを使ってゾンビたちから逃げようとするが、手が滑ってブランコから落ちてしまう。

バグ＝シャースのアンデット奴隷を目撃
SANC(1/1D6)

自分が死ぬような経験 SANC(1/1D3)

エリーの日記にも、上記のような内容が書かれることだろう。

■グレートヒェンの助言

エリーの診察を終えると、グレートヒェンは探索者を呼ぶ。探索者は以下のことを告げられる。

診察の結果、彼女の皮膚に黒い斑点が薄く出始めていることが分かった。この斑点は2日ほどで全身に広がっていくと考えられる。斑点が出ている足首から下は、エリーの血である黒い液体が血管を突き破り凝固してきているのか、ゼラチン状の物体に近い感触をしている。体の形を保ちながらも、徐々に親のニョグタに近い状態に変化しつつあるようだ。エリー自身に痛みなどはなく、変化にも気づかなかったようだ。これを止める手だては、結局見つからない。力になれず申し訳ないと、グレートヒェンは謝罪する。変化を遅らせるには、ニョグタから送られてくる夢を見ないこと、そして精神的ショックを与えないことくらいしかない。また、親の血を飲ませると急激に変化が起こる場合があ

る。

■誘拐されたエリー

診療所で夜眠っていたエリーは、悪夢によって起きてしまう。探索者と話しをするために探索者のもとへやって来る。彼女は探索者と過ごした1年が楽しかったことを話すが、サーカスから抜け出てしまったことの後悔も語る。彼女がいなくなってしまったサーカスは今、猛獣使いのジャンが団長となり、綱渡りのマーシーは最近一輪車で綱渡りに挑んでおり、キルスティンは二回宙返りを成功させたというが、星屑サーカスに客は流れていっているようだ。それを自分のせいだと彼女は思っており、自分の生きてきた意味とは何だったのか、自分は一体何者なのかと不安げに探索者に尋ねる。その瞳には、涙が滲んでいる。探索者に安心する言葉をかけられると、彼女は「ありがとう、今度はいい夢が見られそう」と言って再び病室に戻る。

探索者も戻ろうとした際、エリーの部屋から悲鳴が聞こえる。探索者が扉を開けると、恐怖に体を硬直させたエリーを抱えた謎の人物が、窓から飛び降りようとしていた。それは、人と思われたが違う。雲間から差し込んだ月明かりによってその影の正体が明らかとなった。振り返ったそいつは、人ではなかった。人のような形をしているが、その顔は犬のような特徴を持っていた。皮膚にはカビがこびりつき、かぎ爪を持っている。鋭い眼光を探索者に向けてから、蹄状の足で木を伝って地上へ降りていってしまった。SANC(0/1D6)

窓の外を探索者が見下ろしても、既にエリーを攫った存在は深い森の中へ姿を消している。ここで<聞き耳>を要求。成功で、狼の吠え声が森の中から聞こえる。

ここで、グレートヒェンやリュメルが自室か

ら顔を出し、エリーが攫われたことを知る。探索者が見た化け物のことを話すと、グレートヒェンは沈黙し、リュメルは「それはグールという人を食らう鬼ではないか」と言う。やつらは死体を食べる伝説上の生き物だが、実在する生物である。リュメルは何度か洞窟など暗い場所や墓地でその痕跡らしきものを見たことがある。彼は、もしかしたらこの先にある墓場の村に行ったのではないかと思う。しかし、何故生きた人間であるエリーを攫ったのかは分からない。グレートヒェンに対し何か聞くのであれば、<アイデア>または<心理学>成功で、彼女が青ざめており、何か隠しているのではないかと思う。聞けば、彼女は患者の中にグールがいること、もしかしたらその人か、その仲間がエリーを連れ去ったのかもしれないという。しかし、攫った原因は分からない。

探索者が墓場の村に行くというのなら、リュメルは足が悪くて同行できない代わりに、蹄鉄を貸してくれる。グールが少なからずこれを嫌うということを、彼は知っているからだ。

グレートヒェンは腰を痛めているので、夜の森を歩くことはできないという。しかし、灯りや薬など、必要となりそうな物を探索者に与えてくれる。

▼薬について

精神安定剤。SANCで発狂した時、一錠飲むと発狂の症状を抑えられる。ただし、3錠飲むと、眠気が襲う。CON×5で判定をし、成功すれば眠気に耐えられるが、失敗すると全ての技能にマイナス5%。3錠以上飲むごとに同様にCON対抗をし、失敗するごとにマイナス5%。自分を傷つけるなどして眠気を抑えることもできる。

ウルリーケは部屋にはいない。ウルリーケは

森へ散歩に行ったと、グレートヒェンは教えてくれる。また、彼女に遭遇しても驚かず、協力を求めるといいことを助言する。彼女は人狼で、この森に詳しいので道案内してくれるかもしれないという。ドイツ語が分からない探索者であれば、グレートヒェンが彼女に伝えるべきドイツ語を教えてくれる。探索者は覚えることができるか<アイデア>を振ってもいいし、携帯などに録音してもいいだろう。

■夜の森と人狼

探索者が森の中を歩き墓場村を目指すなら、<ナビゲート>に3回成功する必要がある。しかし、<聞き耳>を用いてウルリーケの居場所を探すなら、その必要はない。彼女は何度か遠吠えをするので成功するまで技能に挑戦できるが、時間は経過するだろう。

ウルリーケと思われる女性が森の木々の合間、月光に照らされて立っている。しかし、その後ろ姿は人のそれとは少し違った。狼の毛皮でも被っているのかと思ったが、それは違う。体つきは女性のそれだが、頭部は狼のそれである。否、よく見れば体つきも、些か膨らんで見える。体毛だ。体毛が彼女を包み込んでいる。スカートの裾から、太い尻尾が覗いている。彼女は月を見上げて吠えた。SANC(0/1D8)

彼女は探索者に姿を見られると、森の茂みに隠れる。しかしドイツ語で交渉技能を使用し語り掛けるか、グレートヒェンから言われた言葉を伝えたと、彼女は人間の姿に戻り探索者を村まで案内してくれる。以下、09.探索 墓場の村を参照。

09. 探索

エリーの診察が終わるまで、探索者は2時間待つことになる。その間、行くことができるの

はグレートヒェンの診察所だ。墓場の村はイベント後、夜に行くことができる。

◆グレートヒェンの診察所

1. 待合室
2. 研究室
3. 診療所の外
4. 病室
5. グレートヒェンの私室

◆墓場の村

1. 村の入口
2. 人家
3. 墓場
4. 洞窟

◆グレートヒェンの診療所

1. 待合室

風が吹く度木々の騒めきが包む待合室は薄暗く、窓から差し込む僅かな日差しは、光合成をして生きる樹木たちの隙間からこぼれた弱々しいものだ。日陰にはマガジンラックがあり、ドイツ語で書かれた新聞や雑誌などが並べられている。

待合室には強い香水の匂いが充満している。それらは複数の匂いが混じり合い、喧嘩している。＜聞き耳＞を要求。改めてこの空間で深呼吸をすると、思わず鼻をつまんでしまうような獣臭さと腐臭が香水に紛れて漂っていることに気づく。香水は、どうやらこの場にいる患者がつけているもののようだ。

■マガジンラック

ドイツの新聞や雑誌が置いてある。最新の新聞は、近くに座るコートの老人が読んでいるが、

古い新聞が1枚ある。

古い新聞は1年前のもので、日本公演（探索者のいる国）で白鳥サーカス団の空中ブランコ乗りのエリーが引退をしたという内容が小さく取り上げられている。引退した理由は発表されておらず「四回宙返りの失敗で体を壊したか？」といった憶測が書かれている。また、その上には「星屑サーカス団 日本公演大成功！三回宙返りは流星の如し」と星屑サーカス団の記事が大きく掲載されている。

■コートの老人 ハンス・エンデ

室内だというのに深く帽子を被り、マスクをしたコートの老人が日陰の席で新聞を読んでいる。彼は顔のほとんどが見えないが、なぜ老人かと探索者が判断したのかといえば、その恰好があまりにも猫背で腰が曲がっている老人に見えるからだ。実際、そうなのだろう。彼は一番新しい新聞に顔を近づけて、熱心に読んでいるように思えたが、探索者が観察しているとチラリと探索者の様子を伺っているのが分かる。

彼は話しかけられるとひどくしゃがれた聞き取りにくい声で、ドイツ語で挨拶をする。しかし探索者が日本人であると分かると、日本語で喋ってくれる。（ほかの国であれば、その言語を喋る）彼は以前、探索者のいる国にも行ったことがあり、そこで少しだけ言葉を学んだという。

彼にどこが悪いのか、なぜここに来たのかと尋ねれば「もう年だから、体に色々とガタがきているのさ。悪いところがいっぱいありすぎて、一つ一つ挙げていたら夜になってしまうよ」と答える。あながち間違いではないだろうが、彼がここにいる理由は他にあるので、＜心理学＞に成功したのであれば、彼の言葉は偽りなのではないだろうかと感じる。

彼は探索者の連れが、空中ブランコ乗りのエ

リーなのかと尋ねる。肯定すれば「やはりか。四回宙返りに挑戦して夢破れた少女。それで体を壊して、グレートヒェン先生の所へやってきた、ということかな？」と言うし、否定すれば「てっきりエリーなのかと思ったよ。失敬、失敬」と言う。しかし、彼はエリーをエリーであると認識している。彼は探索者に空中ブランコ乗りのエリーについてどう思うか、または探索者と過ごしてどんな様子だったのか尋ねる。特にその話題は、彼女の身体能力の高さについてだ。サーカスを辞めた後も、彼女の肉体は衰えていないのか、特別な鍛え方をしているのか、どのようなことができるのか、など。熱心に聞いてくる彼の様子は、エリーのファンのように思える。そう聞かれれば、彼は肯定するし、これはあながち間違いではない。

グレートヒェンがどのような人物かと尋ねられると、彼は「先生はどこでも治療してもらえないような老いぼれや、普通であれば悪魔とでも言われてしまうような人でさえも診てくれるんだ」と言う。他の患者も、同じようなことを言うだろう。

彼はもう診察は終わっているが、暫くここで休憩させてもらっているのだと言う。迎えが来るまで待っているのだ。実際は、夜になるまで待っている。彼は暗い森の中とはいえ日の光の中を歩きたくないのだ。彼がここを去るのは、日が沈んでからである。

彼に対して<聞き耳>を行うと、ラベンダーの匂いの香水をつけていることが分かる。ちなみにラベンダーの花言葉は献身的な愛、沈黙、静寂、疑惑。

■車椅子の男 リュメル・ヒル

壁にかけられている時計を見ている男は大柄で、本来であれば身長がとても高いのだろうが、車椅子に座っているため小さく見えた。彼の膝

から足には毛布がかけられており、足は見えない。彼は探索者に話しかけられると、会釈をする。彼はドイツ語の他にもいくつかの言語が話せる。また、探索者が困っているなら親切に助けようとするだろう。ただし、彼が動こうとすると毛布が滑り落ち、彼の足が露出する。

彼の足は、大柄な体に似合わないほど細く、骨のようだった。否、そもそもそれは肌の色をしていないし、人間の足の形をしていない。木だ。窓の外で騒めく木々の枝のような、木が生えていた。彼は困ったように毛布を取り、再びその足を隠すだろう。彼の奇妙な足を目撃してしまった探索者は SANC (0/1D3)

彼に語り掛けるのなら、彼は足の治療の為にここに入院していること、自身が冒険家であったり世界を飛び回って未知の遺跡や森、洞窟を探索してきたことを語ってくれる。彼の足は、アフリカへ向かった際に恐ろしい魔物の呪いを受け、木になってしまったのだという。その時のことは、あまり思い出したくないので話したくないという。もし彼からその話を聞くのであれば、交渉技能に成功する必要がある。内容は、マレウス・モンストロルムの赤い回転流の神やムブワの化木人についてを参照。彼は赤い回転流の神に遭遇したのである。

彼に洞窟の話やニョグタの話をするのであれば、彼は玉虫色に輝く沼を洞窟で見たことがあるという。洞窟は、この森を抜けた人の寄り付かない村の近くにあるという。かつて、そこには村があったのだが、今では墓場の村と呼ばれており誰もいない。1990年代、墓場から死体なくなっていることが発覚し、魔女裁判紛いのことが行われたという。噂では、吸血鬼か人狼の仕業であったとも。リュメルが立ち寄った際には、村には暴かれた墓場があり、人はいなかったという。

■髪の長い女 ウルリーケ・ミッチェル

長い髪で顔を隠す女は、探索者に興味を持っていないのか、あるいは話しかけられたくないのか椅子に腰かけて窓の外を眺めている。

彼女はドイツ語しか喋れない。リュメルに通訳を頼むことができるだろう。

<聞き耳>成功で、彼女も香水をつけており、ゼラニウムの匂いであると分かる。ゼラニウムの花言葉は憂鬱、慰め、癒し。

彼女は今日だけ入院する予定であるという。どこが悪いのか尋ねられると、教えたくないと言われてしまう。エリーや探索者から距離を置こうとしている印象を受ける。

2. 研究室

研究室には医療関係の資料が山積みにされた机、本棚、薬品類の入った瓶が並ぶ棚で埋め尽くされている。この場所には、人類が知っているとはならない恐ろしい真実の断片が収集され、研究されているのだろうことは想像に容易い。エリーのような存在を救おうと集められたのだろうが、これだけの物を集め知るのに一体どれだけの年月がかかったのだろう。それでも彼女を救い得る手がかりはないのだろうか。否、グレートヒエンが見落としているだけで、きっとあるはずだ。探索者はそう信じて、この部屋に眠る悍ましい知識を垣間見る。

■机

全てドイツ語で書かれている。<目星>成功で、待合室にいるウルリーケの診断書とそれに関係するのであろう資料を発見する。

情報：■ウルリーケ・ミッチェルの診断書 を参照。

■本棚

全てドイツ語で書かれている。が、一部辞書などもある。<目星>成功で辞書を発見できる。今後、<英語>や<ドイツ語>を読む際に<図書館>成功で、手記を見つける。字はグレートヒエンのものだ。<アイデア>成功で、何かから書き写したものではないかと分かる。

情報：■グールについて を参照

■棚

薬品が多く置いてある。

<薬学>で精神安定剤を見つける。用法はイベントの▼薬についてを参照。

<目星>で小瓶に入った黒い液体を見つける。付箋が貼られており、3年前にエリーから採血したものであるということが分かる。中身はやはり以前と同じくねばねばとした粘性の黒い液体で、ほんのりと甘い吐き気を催す悪臭がする。

また、香水の入った瓶があるということにも気づく。香水は二種類あり、ラベンダーの香水と、ゼラニウムの香水だ。

3. 診療所の外

鬱蒼とした森が広がっている。日が出ているうちは、辺りに<目星>成功で動物の足跡を見つけることができる。また、この足跡が森の奥へ続いていることが分かる。

<生物学>成功で、この生物が二足歩行をする人間と同じくらいの動物だが、該当するものを思い当たらない。

昼間は分からないが、夜に外に出た場合（エリーが攫われる前）<アイデア>成功で、誰かに見られているような気がするだろう。また、満月が出ている。

4. 病室

診療所の2階には、病室が4つある。扉の開いている部屋が2つあり、そこがエリーと探索者に与えられた部屋だ。家と同じ高さの木が、窓から清潔な部屋の中を覗いている。

扉の閉まっている病室は2つ。1つはリュメルに与えられた部屋、もう1つはウルリーケに与えられた部屋だ。

■リュメルの病室

ボロボロの旅行鞆が部屋の隅に置かれ、ハンガーにはいくつかの衣服がかけられている。

テーブルの上には手帳があり、彼がそれまで様々な場所へ旅に出ていたことが分かる。彼の過去の予定表はいっぱいだが、これから先は真っ白だ。

鞆の取っ手には、蹄鉄のオーナメントが括り付けられている。＜オカルト＞成功で、これが魔除けであることが分かる。鉄は、悪魔が苦手とするものだ。伝説上ではグールも、鉄が苦手だといわれている。

ハンガーにかけられた上着のポケットには、銀でできた十字架のペンダントが入っている。＜オカルト＞成功で、銀は人狼が嫌うとされる魔除けだと分かる。

■ウルリーケの病室

香水の匂いが充満している。これはゼラニウムの香りだ。

ベッドをめくったり、ベッドの下、部屋の隅などを注意深く見ると（部屋全体に＜目星＞などでもいい）毛がたくさん落ちていることが分かる。髪の毛ではなく、動物の体毛のようである。＜生物学＞成功で、犬系の体毛であると分かる。

テーブルには香水瓶が置かれており、やはりゼラニウムの香水だ。＜知識＞成功で、この香水は市販されているものではないと分かる。＜ア

イデア＞成功で、グレートヒェンの研究室にあった小瓶と同じ物ではないかと気づく。これは、グレートヒェンから貰った物なのだろう。

5. グレートヒェンの私室

彼女の部屋にあまり私物は見られない。彼女が医者としての仕事にばかり明け暮れているであろうことをうかがい知ることができるだろう。

■机

綺麗に整頓された机にはいくつか引き出しがあり、今まで診た患者からの手紙や、患者からの相談の手紙などが多く入っている。＜目星＞成功で、白鳥サーカス団長パートランドからの手紙を見つける。情報■パートランドからの手紙を参照。

■壁の写真

白鳥サーカス団員の写真が何枚か貼られている。この診療所で撮った写真だろう。今年もここに訪れていたのだろう、探索者も見覚えのある面々が写っている。しかしその中には、今までいたはずのエリーと団長パートランドの姿はない。

◆墓場の村

1. 村の入口

宵闇の風が探索者の体を冷やしていく。それに乗って、草木の香りと湿った土の香りが鼻腔を擽る。“死”に臭いがあるのなら、このような臭いなのだろうか。木々のない開けた場所は、満月を雲が覆い隠したせいか、死の黒い影が辺りを包み込んでいるようだった。

入口には朽ちかけた看板が立っている。＜ドイツ語＞で読むことができる。

「この村に立ち入るべからず 人狼出現注意」

探索者がウルリーケに話を聞けば、この村を荒らしたのは人狼ではなく、死体を食べる鬼であると言う。その住処は、おそらく洞窟だろうということも教えてくれる。鬼は墓場に出てきていたが、今では墓場に死体もなく、食べるものがないのでここに多くの鬼はいないはずだという。しかし、臭いがするので1匹は必ずいるだろう。

2. 人家

家はどこももぬけの殻である。主人を失った椅子と机が、寂し気に窓を見上げている。棚などの扉は全て開かれており、中身が入っていないことが分かる。部屋全体に<目星>成功で、武器を発見していい。武器は農具や銃の類がある他、ダイナマイトが3本ある。

机の引き出しの中には、ボロボロになった新聞や本のコピー、白黒の写真などが入っている。それらはすべて、見世物小屋のヨシュカ・ネルソンに関する記事ばかりであることが分かる。また、比較的新しい手帳がある。<ドイツ語>成功で読むことができる。情報：■誰かの手記を参照。

3. 墓場

十字架が突き刺さった墓地には、掘り返された後がある。棺の蓋が開いており、中には何も無い。人骨の一部が、辺りの茂みに落ちている。SANC(0/1)

周囲に<目星>または<アイデア>で、墓を掘り返した方法がスコップなどの道具を用いていないのではないかと気づく。<生物学>で、爪とろうこ状の手を持つ生物が穴を掘ったのではないかと分かる。

また、墓地の周囲に足跡が多くあり、それが洞窟の方へ続いていることが<目星>か<追跡>で

分かる。

4. 洞窟

洞窟の中に足跡が続いている。入口で<聞き耳>に成功すると、中からエリーのうめき声と、ハンスの声が聞こえる。ハンスは何か喋っているが、ここからでは聞き取ることができない。中にいるのは、おそらくこの二人だけだろう。

あとは、クライマックス参照。

10. 情報

■バートランドからの手紙

この手紙は、『空中ブランコ乗りのエリー』にあったグレートヒェンからの手紙に対する団長からの返事である。この手紙は、今の探索者と少し重なる部分があるかもしれない。

また、読むには<英語>を持っている必要がある。（なければ、辞書を使って時間をかけて読むことができる）

グレートヒェン女医へ

エリーが怪物だと？ そんなわけがない。
エリーは怪物にはならない。彼女が怪物になるなんてどうして分かる？

エリーがいずれ怪物になってしまうとしても、私もまだ、エリーという少女がいつかなくなってしまうとしても、私はエリーを愛し続ける。

醜いアヒルの娘だと思い込んでいるだけで、彼女は白鳥の娘なのだ。

エリーはエリーだ。

私が拾い、私が育てた。私が責任を取る。

エリーは私の天使だ。私のものだ。
エリーの成長も、エリーの変化も、エリ

一がエリーであるのであれば、変わりはない。
私の愛も変わりはない。

白鳥サーカス団 団長
バートランド・ケージ

■ウルリーケ・ミッチェルの診断書

<ドイツ語>で書かれている診断書には、以下のような奇妙なメモがある。

- ・臭いを消す為にゼラニウムの香水を処方。他のものだと刺激が強いののでNG
- ・月の満ち欠けによって体力や精神に影響有り
- ・凶暴性は見られず、体の変化のみ。今後も定期的に通ってもらう必要がある
- ・銀製の物を近づけないよう注意

■誰かの手記

<ドイツ語>で書かれたそれはお世辞にも上手いとは言いがたい字で、字を覚えてたの子供が書いたのかと思うほど歪である。

あれは遠い昔のことだ。しかし、今でもよく覚えている。私の住む町に、見世物小屋がやって来た。結合双生児や、巨人、小人、アルビノ……しかしその場にいた者の中で最も異質で奇妙な魅力を放っていたのは、ヨシュカ・ネルソンただ一人だった。彼はその集団の中で最もハンサムで、快活で、その瞳には不思議な輝きがある曲芸師だった。人とは違う人々の中で、彼だけは何かが違ったのだ。

彼の人間とは思えない柔軟性に、誰もが注目し拍手した。彼は体を折り曲げ

て小さな箱の中に収まることもできるし、複雑な体勢で綱渡りや玉乗りだってして見せた。彼自身が芸術だった。

ショーは大成功で幕を閉じるはずだった。しかし、ネルソンが突然苦しみ出し、駆け寄ってきた他の者達を彼が殺害した。それで、新たなショーの幕開けとなったのだ。

彼の顔や手の先が充血したような黒い斑点に覆われ、次第にそれらが全身の毛穴から分泌され彼の肌を包み込んだ。ゼラチン状の黒い塊に包まれた彼は、赤い瞳をギラつかせ、生えてきたかぎ爪を振るい、辺りを滅茶苦茶にした。怯え、混乱した猛獣が暴れ出し、客は大パニック、一人では歩けぬ奇形のメンバーは逃げることもできず仲間であったはずのネルソンにやられた。

逃げ惑う客の中で、私は席を立たずに彼だけを見つめていた。黒へ移り変わる、その変化でさえも美しいと思った。これこそが、彼が魅力的な理由であったのかと納得した。彼は人間ではなかったのだ。飛び散った黒い血が、やはり彼が人間ではないということを証明していた。辺りは騒然としていたが、私だけがその黒い血の虜となっていたようだった。彼はどこから来て、どこへ行こうとしていたのか、突き止めたいと思った。そうすれば、再び彼に出会える気がしたからだ。

私は彼の足跡を辿るかのように、彼がパフォーマンスをした場所を回った。世界各国津々浦々。見世物小屋のメンバーにも聞いたが、彼の詳細は不明だった。しかしある時、彼を育てたという孤児院のシスターに出会った。彼に名

を与えたのも、彼女だったそうだ。

ヨシュカは教会の前に捨てられていた赤子だったという。赤子と記すのは、些か違う気がする。というのも、彼は黒い液体に塗れた状態で発見されたからだ。その奇妙な赤子を、彼女は他の赤子と変わらず、否、特別な感情を持って育てたという。その子供の持つ魔力のような物に魅入られ、彼女は母となったのだ。今思えば、彼を育てたことは恐ろしいことだったのではないかと告白していたが、今でも彼を愛している様子だった。彼が亡くなったことを告げると、仕方がないと口にするも、涙を目に貯めていた。

彼の驚くべき柔軟性を目にした見世物小屋のオーナーが、彼を引き取ったのだそうだ。当時、ヨシュカは12歳だったという。彼は素晴らしい身体能力を発揮し、ゴム人間として人気を博した。その後、引き抜かれてアメリカにも渡ったそうだが、再びドイツに戻ったらしい。そうして、事件が起こり、彼は彼の本来のあるべき姿に戻った。ニョグタと、ニョグタの生みし闇の子供達の終わらない輪舞。闇より出でて闇に戻る、その繰り返しを見届けたい。もう一度、ヨシュカに会いたい。その為には、ヨシュカと同じニョグタの落とし子を探さなければ。落とし子は、ニョグタを呼び出す方法も知っているはずだ。

横に振るかもしれない。彼女は既にこの時点で、洞窟の方にグールのハンスとエリーがいることが臭いで分かっている。探索者が入らないことを決めるのであれば、ウルリーケは家屋からダイナマイトを拾って、探索者に渡す。これで洞窟ごと崩してしまえということだろう。そのようにするのであれば、**エンドB**へ。

ウルリーケの静止に構わず進むのであれば、彼女は迷った末に探索者に同行してくれる。探索者が来るなどというのであれば、彼女は入口で待つ。

▼洞窟へ

洞窟の中は夜であるということもあり暗く、じめじめとしている。もし探索者がかつて『空中ブランコ乗りのエリー』で例の血を飲んでいたのであれば、見覚えのある場所だと感じるだろう。悪夢のような白昼夢で見た、あの場所にそっくりなのだ。冥府へと続くかのような洞窟。探索者にとっては冥府であっても、人間ならざる者にとっては母親の胎内に回帰するような心地がするのだろうか。

進むとすぐに、二つの影が見えてくる。冷たい地面に蹲るエリーと、彼女を揺さぶり命令するハンスの後ろ姿がそこにはあった。暗い世界にこだまするハンスの声は、少女に懇願していた。

「頼む、さあ早く、呼んでおくれ。もうお前には分かっているはずだ、いつでも呼び出せるはずだ。さあ！」

探索者が駆け寄り静止するよりも前に、エリーは探索者の存在に気づいた。彼女は苦しそうに顔を歪ませる。そのことで、ハンスも探索者の存在に気づく。以降、戦闘処理。

▼戦闘

探索者は手に入れた武器や己の技能を用い、

11. クライマックス

洞窟へ向かおうとすると、ウルリーケが一度止めようとする。探索者の服を引っ張り、首を

ハンスに攻撃することができる。ただし、暗く狭い洞窟の中のため、技能値に少しマイナス補正をかけること。ウルリーケが同行している場合、彼女も共に戦ってくれる。ハンスには交渉技能を用いても効かない。また、洞窟内でダイナマイトを使えば、頭上の岩が崩れ、<幸運>に失敗すると1D6のダメージを負うことになる。これは<回避>可能である。

エリーは探索者が一度でも怪我をすると、探索者の傷つく姿を見たくないという思いからか、1ターンかけてふらふらと洞窟の入口へと逃げ、次のターンでニョグタを呼び出してしまう。「大丈夫。もう、痛い思いはしなくていいよ。ありがとう。これで終わりだから」とエリーは最期に言うかもしれない。

探索者が無傷で戦闘が終了した場合、彼女は苦しみながら「ねえ、私は私だよね……？ 私はエリー。そうでしょう？ けど、もう疲れちゃった。私がエリーだったこと、忘れないでね」と言って、ニョグタを呼び出す。

■親との対面

閉ざされし少女の瞳。その瞳が白い鳥が焦がれる空のように青いことを、探索者は知っている。しかし、見開いた彼女の瞳は本来彼女に流れているべきはずの血液の色。赤い瞳が、暗闇で光った。その視線の先に、屍を喰らう鬼の背後の闇が、ぐにやりと歪んだ。闇より出でし暗黒の塊、死の臭いを纏わりそれはぐちゃりぐちゃりと不快な音を鳴らし、波打つようにして現れた。探索者の持つ灯りや、洞窟の入口から僅かに齎される月光がその巨体を照らすと、暗黒は玉虫色に輝いた。あれがヨシュカ・ネルソンを生み出した親、そして他ならぬエリーの親、ニョグタだというのだろうか。否、それ以外に考えられない。彼女の血液として流れている黒い液体は、まさにこの生物から産み落とされた

証である。

SANC(1D6/1D20)

ここでのSANCは、ウルリーケが同行している場合彼女にも適用する。

すると暗黒の塊の壁から、人の顔が浮かび上がってくる。黒い目、鼻、口、腕、脚が壁を押しつけて、人の形となって分離した。それは男だった。黒い液体を滴らせながら、その場に居る者達の前で慣れたようにお辞儀をした。そのお辞儀は、地面にまで手がついてしまいそうなほど柔らかい。その顔は、黒い液体に塗れていてよく分からなかったが、ヨーロッパ風のハンサムな男性のそれだった。

彼を見て、ハンスは「ヨシュカ・ネルソン！ ああ、どれだけ貴方を待っていたことか……」と、彼に近づく。すると、彼はニコリと柔和な笑みを浮かべ腕を広げる。その胸の中に飛び込むかのようにして走る猫背の男を、次の瞬間無数の黒い触手が貫いた。否、貫いたのではない。彼の体の穴という穴にその巻きひげのような触手がねじ込まれ、彼を窒息させているのだ。宙に浮いたハンスの体は、背後の暗黒の塊の中に消えていった。熱い抱擁をされ、きっと彼も満足したことだろう……。

「おかえり、エリー。僕の妹」

ヨシュカは入口に立つエリーに手を差し伸べる。エリーは赤い目でそちらを見ており、黒い涙を流しながらヨシュカと親のいる洞窟の奥へゆっくりと歩き出す。探索者が止めるのであれば、STR対抗が発生する。エリーのSTRは1ターン目は本来のエリーのSTR18だが、それ以降1ずつ増えていき、最終的には怪物としての姿になった際のSTR29になる。

彼女は探索者に今までの感謝と、楽しかった思い出を語り、人生で得た幸せを伝えるだろう。

そして、「エリー」を忘れないでほしいと願う。彼女は自分の流した涙によって、黒く染まっていく。

「私は醜いニョグタの娘。最初から、人間にはなれなかったんだわ。人間の子ではないから。だけど、私はエリー。そうあなたが教えてくれた。それだけで十分。私はいつまでもあなたの中で生き続ける。あなたの記憶の中の私は、輝いているのかしら。さようなら。Auf Wiedersehen. (アウフ・ヴィーダーセーエン ※独語でさようなら)」

彼女は早くこの場から逃げるように探索者に言う。逃げないようであれば、▼エリーを見届けるへ。

エリーにニョグタの退散方法などを聞く、これからどうすればいいか尋ねると、彼女はニョグタの退散方法を教えてくれる。それは、洞窟の入口で短い呪文を唱えるというものだ。これには1D10の正気度の喪失と、MP20が必要である。入口まで逃げ、探索者とウルリーケで力を合わせ行うことができるだろう。エリーに退散方法を聞くということを思いつかないようならば、KPはPLに<アイデア>を振るよう指示し、召喚方法を知っていたということは退散方法も知っているのではないかと思ひ至らせること。

▼エリーを見届ける

悪臭を放つ黒い液体に塗れたエリーは、ヨシユカの手を取った。二つの黒い影が、暗黒へ帰っていく。鳥は空へ、豹は草原へ、鮎は川へ、あるべき場所へと。それが自然の摂理であるように。暗黒の子供たちはまるでこれから楽しいショーでも始まるかのように、手と手を取って軽やかに黒い液体の中に飛び込んだ。これから、見世物小屋のゴム人間ネルソンと、空中ブランコ乗りのエリーのショーが暗黒の世界で繰り広げられるのだろうか。

■洞窟からの逃走

エリーがニョグタのもとへ帰る11ラウンドのうちに洞窟から脱出できていない場合、逃走ロールを行う。このイベントが発生するのはエリーを見届けた場合、または発狂によってその場にとどまっていた場合が考えられる。洞窟への入口までは5ターンかかるものとする。ニョグタは探索者に向かって黒い触手を伸ばしてくる。この触手攻撃の成功率は100%で、1D10のダメージを負わせる。

探索者は洞窟の入口まで逃げ、洞窟の入口を塞ぐ為にダイナマイトを用いるといいだろう。ダイナマイトの使用に技能は要らない。

あるいは、エリーにニョグタの退散方法を聞いている場合、退散の呪文を使用する。どちらの方法でもニョグタを止めることができる。

洞窟から逃げ出し何もしない場合、▼黒い赤子イベントが起こるが、それ以外はエンディングAへ。

▼黒い赤子

探索者が洞窟から逃げ出すと、洞窟の中から赤ん坊の声が聞こえてくる。探索者がそちらを見るのなら、洞窟の入口に小さな何かが捨てられている。この場には似つかわしくない、それは赤子だった。否、赤子というのに赤くはない。ついさっき産み落とされたかのようなその子は、人間の子供の姿形をしていたが、黒い液体に塗れていた。覗き込んだ探索者に気づいたのか、赤子が閉ざしていた瞳を開ける。その瞳を見て、探索者はハッとする。鳥が焦がれた青い空の色。エリーの瞳の色が、探索者を見上げて泣いている。

探索者はこの赤子をどうするだろうか。置き去りにするだろうか。その場で殺すだろうか。洞窟の中へ帰すのだろうか。それとも……。

赤子を洞窟へ帰すとなれば、ニョグタが探索

者を襲ってくるだろう。そして、赤子を受け取る気が今のニョグタにはない。

置き去りにしようとするなら、ウルリーケが拾おうとする。彼女を説得するなら、彼女は引き下がる。彼女は、この赤子に魅了されてしまいそうになっているのだ。

殺すのであれば、それは容易だ。赤子は悲痛な泣き声を響かせて、透き通った涙を流して死ぬ。探索者はSANC(1/1D3)の後、ニョグタをどうにかするのであれば**エンド A**へ、放置するのであれば**エンド D**へ。

赤子を拾うのであれば、**エンド C**へ。

12. エンディング

■エンド A Leben (生きる)

探索者はエリーのいない日常にかえる。これが探索者の、本来の日常だったはずだ。それなのに、彼女がいないだけでこうも違うのかと患ってしまうことだろう。エリーは日常の一部になっていたということを、嫌になるほど知らしめる喪失感が探索者を襲った。しかし、それもいずれ癒されていくのだろう。こんにちとはさよならを繰り返すのが人生であり、これからもそれは続いていくのだから。

探索者は知っている。白鳥サーカス団の元空中ブランコ乗りのエリーは、黒い血を持つ怪物の子供だったということを。そして、エリーというただ一人の少女だったということを。どうか、忘れないでいてほしい。あなただけでも。

■エンド B Ich weiß es nicht. (私は知らない)

探索者はエリーの最期を知らぬまま、エリーのいない日常にかえる。これが探索者の、本来の日常。

白鳥サーカス団の元空中ブランコ乗りのエリーは、四回宙返りに失敗し表舞台から姿を消し、その後を語られることはない。かつてのファンは、彼女が誰かと結婚したのかもしれない、あるいは怪我をしてどこかの病院で静かに療養しているのかもしれないと思い思いに想像している。エリーがどうなったのか、誰にも分からない。彼女が本当に怪物の子であったのか、親の元に戻ったのかも、何もかも分からない。あなたでさえも。

■エンド C Um zu wiederholen. (繰り返す)

黒い液体に塗れた赤子に、探索者は何と名前を付けるだろうか。どのように育てるだろうか。あるいは、研究の為にどこかへ送ってしまうのだろうか。それでも、一度抱き上げた探索者であれば、命の重さ、命の温もり、その子の笑顔が瞼の裏に焼き付いて離れない。かつての男のように、探索者も繰り返す。太陽は沈んでもまた昇る。朝と夜とを繰り返すように、子供と出会い、怪物となって別れる。こんにちとは、さようならを繰り返す。後悔しても止まらぬ輪舞。探索者は求めてしまうだろう。再びエリーに出会う日を。

■エンド D Auf Wiedersehen. (さようなら)

黒い液体に塗れた赤子を、探索者は置き去りにした。これでもう、二度と出会うことはないだろう。エリー、黒い怪物、黒い赤子……。全てが夢だったかのように、探索者は日常へと帰っていく。

彼女のいない日常が当たり前になってきた頃だった。世界で一番有名になった星屑サーカス団が、日本で新メンバーを加えて公演をするという。そんなニュースをちらりと見た時、探索

者は目を疑う。小さな箱の中に収まる、人間とは思えないほど柔軟な少女。まだ幼いその娘は、テレビ画面の向こう側で探索者に笑みを向けている。その顔が、その瞳が、あの時洞窟の前で見た赤子そっくりだった。

■エンド E Zirkus (サーカス)

黒い触手によって死んだ探索者は、薄れゆく意識の中、ずるずると暗い洞窟の中に引きずり込まれるのを感じた。そして最後に、エリーの笑い声が聞こえた。

探索者が次に目を覚ました時、探索者に体はなかった。探索者の意識だけが、黒い塊の中に存在していた。

「紳士淑女の皆様！ これより闇の子供達によるサーカスをご覧にいれましょう！」

ゼラチン状の黒い世界の黒いテントでは、黒い手品師が黒い箱の中から折り畳まれた黒い男ネルソンを取り出す。ネルソンはペコリとお辞儀をした。その時、探索者の目の前で黒い豹が飛び出した。かと思うと、黒い鮎となって液体

の中に消えた。すぐに、液体の中から黒い鳥が飛び立つ。鳥は四回宙返りをすると、黒い少女の姿となって、黒いブランコを掴んだ。彼女の乗ったブランコは黒い壁に衝突し、少女は液体となって吸収された。しかし次の瞬間、再び壁の中から黒い鳥が羽ばたいた。

探索者は、終わらないサーカスの世界に取り込まれてしまった。黒い怪物に吸収されるその時まで、探索者は存分に彼らの技を楽しむことができるだろう。

「ね、(探索者)。拍手して」

■クリア報酬

ニョグタを退散させた/洞窟を崩しニョグタを倒した 1D6

新たなニョグタの落とし子を世に解放していない 1D3

13.エピローグ

水晶玉を覗き込んだ女性は、零型の飾りのついたヘッドティカを揺らし溜息を吐いた。

「例えば、あなたがとても有名で歌うことが生きがいの歌手だったとしましょう。そんなあなたは余命一ヶ月だと宣告されてしまいました。声の出なくなる薬を飲めば、余命を一年に伸ばすことができます。薬を飲まなければ、一ヶ月で死ぬでしょう。……そう言われたら、あなたはどちらを選択しますか。一ヶ月、できる限り歌って過ごすのかしら。最期の歌を歌う時、あなたは笑顔で逝くかしら。歌手として歌うことはできなくなっても、作曲家や作詞家として残りの一年を過ごすのかしら。新たな自分を発見できて、あなたは楽しいと思えるかしら。どちらも正解。どちらも間違いではない。それはあなたが決めることだもの。それでも、他者もあなたと同じように考えるとは限らない。人生にとって大切だと思うものが、あなたと彼女では違うこともある。けれど、結局答えなんてものは、残された者が勝手に出すしかないの。だから、答えはあなたの中。もう一つは闇の中。この後も、きっとあなたの物語は続いていくのだろうけれど、そこに救いがありますように」

黒髪の占い師はそう言うと、瞬きの間に姿を消した。

昔ね、空中ブランコ乗りのエリーがいたんだよ。

今はもう、いないのだけれど。

君は見たのかい？ それは良かったね。

君の瞳の中で、彼女は今も飛んでいるのだろうね——